

白い手のハーマイオニ

『冬物語』における王妃の裁判と三つの国の文化摩擦

石 井 美 樹 子

むかしむかしあるところに……

日本産のビールの銘柄にもなっている「冬物語」、ビールは淡くほろ苦い北国の味がする。ロマンティックな響きとはうらはらに、『冬物語』は、嫉妬で妻や親友を殺そうとする王さまをめぐる恐ろしい話なのだ。ここには昔話の手法がいたるところに取りいれられ『冬物語』の舞台は、イギリスから遙か遠く離れたボヘミアとシチリア。作者シェイクスピアのように、ブリトン島から外へ一步も出たことのない当時の人びとにとって、舞台がいつもわからぬボヘミアとシチリアに設定されているだけで、昔話の「むかしむかしあるところに……」と同じ効果を持っていた。この効果により、劇に体制批判がこめられていても、当局の検閲の目をそらすことができるし、どんなに奇想天外で現実離れた物語でも観客に受け入れられる。『冬物語』では、最後に、死んだはずの娘が生きていることが分かり、死んだ王妃が立像となってあらわれ、立像は動きだす。そして、親と子どもの再会が現実のものとなり、夫と妻は和解し、友情は復活され、物語はハッピーエンドをむかえる。

シェイクスピアの時代、すべての芝居は当局の検閲を受け、上演許可を得なければならなかった。だから、舞台を外国、ボヘミアとシチリアに設定することは、検閲の目をくらます最良の作劇方であった。体制批判をこめた物語の場合は、時代不明の外国のお話であると主張するにこしたことはない。

さらに、『冬物語』のように、シェイクスピア劇には、物語がどんなに奇異であっても、そこには当時の現実がしっかりと反映されている。

物語には現実が反映されている

児童文学者の野村滋は「昔話の残酷性——グリム童話をめぐって」（東京子ども図書館、一九七五年）のなかで、「グリム昔話に出てくる残酷な刑罰は、すべて事実を反映したものに基礎をおいたのだということがわかります。昔話の中の残酷さは、歴史的事実を反映したものでこそあれ、現実に存在もしない残酷さを描くことによって、人を残酷な行為にかりたてるものではないということです」と書いている。

たとえば、昔話で用いられる罰であるが、白雪姫のまま母が死ぬまで履かされる真つ赤に焼けた鉄の靴は、「焼きゴテ」と同様に、魔女裁判でしばしば用いられた。魔女と断罪された女性は、熱した鉄の長靴をはかされ、その長靴はハンマーで打ちつぶされた。また、「鉄の処女」と呼ばれる拷問具は、女のかたちをした鉄の箱で、内側に鋭い鉄が打ちつけられており、扉をしめると、なかの人間を突きさすようになっていく。「ガチョウ番の娘」の腰元が受けたのは、この刑罰である。

『冬物語』の第一幕では、王が故なく王妃と親友の仲を疑い、親友を殺害し、王妃を不貞罪で告訴し、処刑しようとする。このテーマの背後には、実は、当時の人びとのなかで知らぬ者としていない重大な歴史的事実が隠されている。王が王妃を裁判にかけ、断頭台に送ったヘンリー八世時代の恐怖政治は、いまだに人びとの脳裏に鮮やかに刻まれており、それが再現されているのだ。

むかしむかしある男がお墓のそばに住んでいました

ボヘミア王ポリクシニーズとシチリア王リオンティーズは幼少のころいっしょに育った間柄。ポリクシニーズはリオンティーズの宮廷を訪れ、手厚いもてなしを受けていた。九か月の滞在後、これいじょう国を留守にできないといって暇乞いをするが、リオンティーズは引き留め、妃ハーマイオニに加勢を頼む。ハーマイオニの懇願に応えて、ポリクシニーズは滞在を一週間延期することにする。

親しげに語りあうハーマイオニとポリクシニーズ。二人の様子を見たリオンティーズは突然、激しい嫉妬にかられる。

「妃の熱心さは度がすぎる。友情の交歓も度がすぎると情欲の交換となる。この胸騒ぎはなんだ。」（一幕二場）

ハーマイオニは九か月の身重のからだ。ポリクシニーズのシチリア滞在も九か月。妻ハーマイオニの胎の子は、ポリクシニーズの子なのではないか。リオンティーズは嫉妬に狂い、腹心の臣下カミロにポリクシニーズの殺害を命じる。お妃の潔白を信じるカミロは、ポリクシニーズに危険がせまっていることを伝え、シチリアをすぐに離れ

るように忠告する。

夜陰にまぎれてシチリアを脱出するにポリクシニーズのかたわらには、カミロの姿があった。

なにも知らないハーマイオニは幼い王子と遊んでいる。お妃が王子に「お話をしてちょうだい」というと、王子はいう。「楽しいのがいい？ それともこわいのがいい？ 冬のお話にはこわいのがいいんだけどな。ぼく、妖精やお化けの話を知っているよ。」（二幕一場）王子はお化けの話を始める。

「むかしむかしある男が——お墓のそばに住んでいました。……」

幼い少年には、母の身に恐ろしい運命がせまっていることなど予想もつかない。やがて無邪気な少年が語る物語がほんとうのものとなる。

嫉妬にかられて妻の貞節を疑い、親友を殺害しようとする王様

王子が「小さな声で」母の耳もとでそとお話をしているところに、リオンテーズが入ってくる。かれは、妃がポリクシニーズと通じていた、胎の子は自分の子ではない、彼の子だといって、妃の不貞を激しくなじる。無実を必死で訴える妃のことばにいつさい耳をかさず、妃を投獄する。そして、デルフォイのアポロの神殿に使いをやつて神託をおおぎ、妃を裁判にかけ、処刑しようとする。

嫉妬のために理性を失ったリオンテーズにとり、いまやお妃は憎んでも憎みきれない存在だ。「あの女が生きている限り、わが胸は重荷だ！」

妄想にかられ、妻に不貞を働かれて親友に逃げられたといつて齒ぎしりするリオンテーズの姿は、愚かでしかありえない人間心理の地獄絵だ。

昼も夜もこころの安まることがない。あのことを

このように思い悩むのは、弱いからだ、こころが弱いからだ。

その原因がとりのぞかれれば――原因の片割れである

あの不貞な妻だけでも。女たらしのボヘミア王は

おれの手の届かぬところにいる。おれの智恵の矢の

射程外にいる、おれの策略の通じない身だ。だが

妻のほうはおれの手中にある、あの女を火あぶりにして

この世から消し去れば、おれのこころの安らぎも幾分か

もどってくるかもしれぬ。(二幕三場)

人間の感情のなかで愛ほど不確かで、はかないものはない。長い年月をかけてはぐくんだ愛情も友情も、いつしゅんの気の迷いや故なき疑いのために、あつというまに終え去る。愛したぶんだけ、人は相手を憎む。人を愛した経験がある者ならば、だれもが愛のはかなさ、弱さを知っている。愛した妻の死を願うリオンテーズは、まざまざと人間のこころの頼りなさを見せつける。ささいな理由から、愛する人や親友を裏切ったことのない者はいまい。

リオンティーズはポリクシニーズを殺害しようとするが、ポリクシニーズはカミロを伴って密かに帰国の途につく。妃の不義の相手に逃亡されたと齒ぎしりするリオンティーズはハーマイオニを裁判にかける。ハーマイオニが法廷に姿を見せると、起訴状が読みあげられる。

役人 「シチリア王リオンティーズ陛下の妃、ハーマイオニを、大逆罪のかどによりここに起訴するものである。被告は、ボヘミア王ポリクシニーズと不義を犯し、さらにカミロと共謀の上、夫君たるわが国王陛下のおいのちを奪おうと企てた。その陰謀がたまたま一部発覚すると、被告ハーマイオニは、臣下としての忠誠の誓いにそむき、かれらの安全をはかって、夜の闇にまぎれて逃亡しよう助言し、助力したのである。」（三幕二場）

これは、ヘンリー八世が、二番目の王妃アン・ブーリンと、五番目の王妃キャサリン・ホワードを裁判に引き出したときに読み上げられた罪状にほかならない。

ハーマイオニ王妃の裁判の場をかりて、シェイクスピアは、恐怖政治で人民を縛った残酷な時代を再現し、鋭く批判している。

国王が仕組んだ王妃殺害の陰謀が批判されているとなれば、作家は大逆罪に問われて投獄され、芝居は上演禁止にあう。だが、舞台がシチリアに設定されているために、当局は手を伸ばすことができない。

イギリス史をひもとけば一目瞭然であるが、王妃が法廷に召喚された事例は、ヘンリー八世時代に三件あるだけである。王妃ハーマイオニが法廷で裁かれる場面を目にした当時の観客は、離婚裁判のために法廷に引きだされた

ヘンリー八世の一番目の妃キャサリン・オブ・アラゴンと、不貞のとがで裁判にかけられ断頭台に送られたヘンリー八世の二番目の妃アン・ブーリンと五番目の妃キャサリン・ホワード（アン・ブーリンの従妹）の痛ましい姿をここに思い描いたにちがいない。

夫が最愛の妻を疑い裁判にかけ、親友の殺害を謀り、妻が生んだ女兒を荒野に捨てさせるのは、恐い「冬のお話」でなくてなんであろう。ハーマイオニの場合は、アポロの神託が王妃の無実を証明したために、死刑を逃れるが、ヘンリー八世の三人の王妃たちは悲劇的な運命に突入していった。

不貞のとがで裁判に引き出される王妃

ヘンリー八世は、王妃キャサリン・オブ・アラゴンの女官アン・ブーリンに目をとめ、求愛するが、アンは王妃にしてくれなければ愛を受け入れることはできないと、王の愛を拒絶する。愛を断られたヘンリーはますますアンに熱をあげ、ついに、王妃キャサリンとの離別を考える。キャサリンは夫が自分と離婚し、アン・ブーリンを王妃にむかえようとしていることを知ると、ローマ教皇庁に訴える。ヘンリーはイギリスで離婚裁判を開くが、裁判に出頭したキャサリンは、その席に自分を弁護する者がいないことを理由に裁判の無効を主張する。キャサリン王妃は身の潔白を証言するために、最初の裁判に姿を見せただけで、あとは断固として出廷を拒み続けた。

ハーマイオニにも弁護人がいない。ハーマイオニは無実を訴え、王妃キャサリン・オブ・アラゴンが主張したように、この法廷には王妃を裁く権利はないと主張し、みずからを弁護する。

ごらんください。

王の伴侶であり、

王座をわちあう妃であり、偉大な王の娘です。

将来ある王子の母でもあります。このわたくしが法廷に引きだされ、

公衆の面前で命と名誉のために

申し開きをしているのです。……

わたくしがあのかたに見せた愛は、一国の王たるあのかたが

当然受けてもいいものであり、一国の王妃たるわたくしが

あたえても恥ずかしくない愛でした。あなたご自身が

お命じになったとおりの愛を示したにすぎないのでから。(三幕二場)

キャサリン・オブ・アラゴンはスペイン王フェルディナンド王とカステイリア女王イザベラの娘であった。彼女はハーマイオニと同じく「王の伴侶であり、王座をわちあう妃であり、偉大な王の娘」であり、王位継承者メアリー王女の母だった。

キャサリンの甥にあたる神聖ローマ帝国皇帝カール五世（キャサリンの姉ホアナの息子）の軍がローマに侵入し、教皇をサンタンジェロ城に監禁し、カール五世はヘンリー八世に離婚を許可しないように強要していた。かたやへ

ンリー八世は、離婚許可を出さなければ、ローマと決別してプロテストタントの国教を設立すると脅しをかけ、教皇は身動きができない状況にあった。六年ものあいだ逡巡したあと、ローマ教皇はキャサリン王妃の訴えを認め、ヘンリーの嘆願を拒絶する。教皇がヘンリーに離婚を禁じる決断を伝えたときはすでに、ヘンリーはローマとの決別を実行に移していた。

一五三四年、ローマ教皇庁と袂を分かったヘンリー八世はイギリス国教会を設立し、みずから作った教会法によりキャサリン王妃と離別し、女官アン・ブーリンと結婚する。それから三年後、ヘンリーはアン・ブーリンの女官のジェーン・シーモアに目をとめ、アンをなきものにしようと謀る。アンは王妃の座を奪われ、臣下の五人の男と不貞をはたらいたというがで断頭台に送られる。アンが王妃の座にあったのは、わずか一千日であった。

ヘンリー八世の五番目の妃キャサリン・ホワードもアン王妃と同じ運命を辿った。その後も、悪魔が触手を伸ばす恐怖政治は果てしなく続いた。

アン・ブーリンは王の娘ではなかったが、「王の伴侶であり、王座をわかちあう妃であり」、王位継承者エリザベス（後のエリザベス一世）の母であった。メアリー王女も、エリザベス王女も、父と母の離婚に伴い、王位継承権と王女の称号を剥奪され、ハーマイオニの娘パーディタ（失われたという意味）のように「失われた子」となった。ハーマイオニはどのように自己弁護してもかいたくないことを悟ると、命は失っても、子どものために名誉だけは守らなければならないと決意する。そして、死刑という脅しをかける王にむかって、死を厭わないと言い放つ。

脅そうとされる死刑こそ、

わたくしの望むところでございます。

あなたの愛が失われた以上。王冠も楽しい日々も

わたくしにとって、命も

大事なものではありませんでした。

(三幕二場)

この心中こそ、アン・ブーリンが最後に達したあきらめの境地であった。

断頭台の露と消えたアン・ブーリン

ヨーロッパ史をひもといてみよう。裁判にかけられた王妃が、どこにいたであろうか。戴冠して神の代理人となり王権を分かち持つ王妃は治外法権の特権を有する。世俗の法も教会の法も手を伸ばすことはできない。王妃が裁判にかけられたり、処刑されたりする話は前代未聞。アン・ブーリンは法の名のもとで死刑に処せられたヨーロッパ史上はじめての王妃である。マリー・アントワネットが処刑される三世紀も前の出来事である。

シェイクスピアの時代の観客は、裁判に引き出されるハーマイオニを目にして、ほんの一世代まえに起こった衝撃的な事件を思い浮かべたにちがいない。

一五三六年五月二日、ヘンリー八世の二番目の妃、エリザベス王女（のちのエリザベス一世）の母アン・ブーリンがグリニッジ宮殿で逮捕され、ロンドン塔に投獄された。罪状は不貞と近親相姦、そして、五人の愛人と謀って

国王の命を狙ったという大逆罪。

ロンドン塔に投獄されたアンは、ロンドン塔長官キングストンに、「わたしは死ななければならないのでしょうか」とたずねた。キングストンが「陛下は正義を司るかたです」と答えると、アンは声を出して嗤った。ヘンリーが白を黒といわせるためには、赤子の首を捻るほどやすやすと法を歪曲することを知りつくしていたからだ。三年前、ヘンリーはアンと結婚するために、離婚に反対するローマ教皇庁と決別し、イギリス国教会を設立し、前妻キヤサリン・オブ・アラゴンを離別した。六年間待った末に、アンはついに王妃の座を獲得した。しかし、それから三年後、悲劇の坂道を転げ落ちてゆく。アンが男の子を生んでいたら、次期君主の母として命を長らえることができたであろう。

裁判は異例の速さで進められた。アン王妃とともに、五人の若者が逮捕された。五人のなかにアンの弟ジョージ・ブーリンがふくまれている。残る四人はみな、侍従として国王夫妻の近くで仕えてきた者たちであった。五人のうちのひとり、サー・ヘンリー・ノリスは玉爾保管官という重職に就いていた。アンの弟を除く四人の被告は先に裁判にかけられ、死刑を宣告された。刑は絞首刑。首を絞められたあと、息のあるうちに腹を裂いて臓腑を引き出し、去勢され、最後に手足を切断されるという極刑だった。

アンより先に、五人の被告が処刑された。罪のない若者を巻き添えにしたのは身を切られる思いだと、アンはロンドン塔長官キングストンに語った。

五月一五日月曜日、アンと弟ジョージがロンドン塔の大広間で引き出された。王妃の裁判を一目見ようと集まった群衆はおよそ二千人。

投獄された当初のアンは感情の起伏が激しく、けたたましくヒステリックに囁っていたかと思うと、さまざまと涙を流し、運命を呪った。だが、裁判に姿を見せたときは、落ち着いていた。次ぎ次ぎと読みあげられる罪状を「いいえ」といつて否定した。アンはどんなに弁護してもかいのないことを悟っており、キングストンにこう語っていた。「無実を証明するためには、わたくしの身体を切り裂いてもらわなければなりません。いいえと答えるのがいになにができません。」スペイン王女のキャサリン王妃とちがって、アンの力はヘンリーを虜にした若い女性の魅力だけ。その魅力も、ヘンリーと出会って一〇年以上たったあとでは、失せていた。アンの運命はヘンリーの手に握られていた。

裁判が始まった。

「被告は不貞を働いたか。」

「いいえ。」

「被告はノリスに結婚を約束したか。」

「いいえ。」……

死刑の判決をいいわたされると、アンは裁判官たちにむかってひとことひとこと囁みしめるようにいった。

陛下がわたくしにお示しくださった優しさと、おあたえくださった大いなる名誉と、わたくしに払われた敬意を考えますれば、わたくしは当然陛下に身を低くしてお仕えしなければなりません、常にそうだったわけでは

ありません。陛下を嫉妬する気持ちがわたくしのこころのなかに忍び込んできたこともあります。……でも、神様に掛けて、陛下にたいして後ろめたいことはなにもしておりません。

ハーマイオニが裁判に引き出されたとき、「王の伴侶として玉座の一半を占める王妃であり、王の娘として生まれ、将来ある王子の母である私が」と述べているが、キャサリン・オブ・アラゴンもスペイン王の娘であり、玉座の一半を占める王妃であり、王位継承者メアリー王女の母であつた。アン・ブーリンは王の娘ではないものの、王の伴侶であり、王位継承者エリザベス王女の母であつた。ハーマイオニに二人の王妃が重なってこないだろうか。

ロンドン塔のベル・タワーがアンの最後のすみかとなつた。最初の数日間、アンは死の恐怖に怯え、精神の均衡を失っていたが、次第にあきらめの心境に達し、死出の旅路の準備をした。王妃のところが揺れ動くさまを目にしたキングストンは、こう述べている。

「わたしは、大勢の死刑囚を目にしましたが、アン王妃ほど、楽しそうに、また喜ばしそうに、処刑を待つ人を見たことはありません。」

一五三六年、五月一八日、処刑前日、アンはカンタベリ大主教に告解をし、聖別されたパンと葡萄酒にかけて無実を誓った。

キングストンが処刑に痛みは伴わないといって慰めると、アンは「処刑人はとても上手な方と聞いています。それに、わたくしの首は細いですから」といってから、けたたましく笑った。

ヘンリーはカレーから処刑人を呼び寄せていた。首切り台に頭をのせる刑ではなく、囚人をひざまずかせ、うしろから斬首するフランス式の方法で処刑することになっていた。この刑の場合、処刑人の腕が悪いと、首が胴体から離れるのに時間がかかり、囚人は地獄の苦痛を味わう。

一九日、王妃が処刑されるという前代未聞の出来事をわが目におさめようと、大勢の人がロンドン塔につめかけた。アンは、ロンドン塔のタワー・グリーンに設営された断頭台にあがると、群衆を見わたしながら、ことば少なに別れを告げた。

女官に目隠しをしてもらってから、アンはひざまずき、「イエス・キリストよ、わが魂を受けたまえ。おお、主なる神よ、わが魂を憐れみたまえ。キリストよ、なんじにわが魂をゆだねます」といった。それが合図であった。アンは唇がまだ動いているあいだに、すべてが終わった。享年三五。

アンは処刑が終わったことを知らせる大砲の音を聞くと、ヘンリーは華麗な船をしたててテムズ川をくだり、シーモア邸に行き、翌日、アンは女官だったジェーン・シーモアと婚約した。アンは裁判と処刑は、巧妙に企てられた陰謀劇だったのだ。

残酷な時代の再現

家族の利益や政略のために女性が埋没する時代にあつて、アンは一人の女性でありつづけた。強烈な個性を武器に、キャサリン王妃を押しつけ、王妃の座を獲得した。

アンは一一歳のときに海を渡つてネーデルランド総督、ハプスブルグ家のマルガレーテのフランドルの宮廷で教育され、その後、フランスの宮廷でクロード王妃に仕えながら八年近く過ごした。美人ではなかったが、優雅な立ち居を身につけフランス語を流暢に話すアンはイギリスの宮廷で異彩を放った。自分のことばで語り、自分の主張を通し、ファッションもふくめて自分流のライフスタイルを守り、人を惹きつける魅力を存分に利用し、貴族の娘から王妃の座に登りつめた。アンはヘンリーの愛を、王妃にしてくれなければといつて六年間も拒みつづけ、イギリスの宗教改革の直接の要因となり、それを完成させた。このようなアンを、のちの人びとは、「歴史の作者」(the maker of history)と呼んだ。短くも悲劇的な生涯ではあつたが、不出世の女王、エリザベスを遺し、エリザベスはイギリスをヨーロッパ一の強国に育てあげる。

アンの死後も死が翼を広げて人を襲う惨劇は果てしなくつづき、「王の宝石」といって溺愛されたヘンリー八世の五番目の王妃キャサリン・ホワード(アン・ブーリンの従妹)も、二〇歳という若い身でアンと同じ運命を辿った。

シェイクスピア時代の観客は、ハーマイオニにキャサリン王妃、アン王妃、キャサリン・ホワード王妃を重ねた

ことであろう。そして、「失われた子」パーディタにアン・ブーリンの娘エリザベスを重ねたことであろう。

アンの処刑に先だち、不貞を理由に、ヘンリーとアンの結婚は無効とされ、エリザベス王女は庶子の烙印を押されて王位継承権を剥奪された。まさに、「失われた子」となったのだ。「失われた子」のパーディタは一六年間のあいだ羊飼いの娘として育てられるが、最後にはシチリア王女であることが分かり、シチリア王国の世継ぎとなる。パーディタのように、「失われた子」であるエリザベスも、幾多の試練を乗り越えてイギリスの王冠を我が手にした。

多くの昔話のように、『冬物語』でも、人間が海の藻屑となったり、熊に食いちぎられて絶命するといった残酷な場面がある。処刑は日常茶飯事、公衆を前にした処刑は庶民の娯楽にさえなっていた。ロンドン橋をほぼ渡り終え、劇場や見せ物小屋が立ち並ぶ南岸のサザック地域の入り口には、日干しになって槍の先にぶらさがる犯罪人の首が通に三個ほどさらされていた。

一五九二年にイギリスを旅したドイツのウィッテンベルグのフレデリックという名の人が、次ぎのような記述を残している。

しかるべき立派な人物の首が三四あまりさらされていた。騒乱罪やその他の罪で有罪とされ、首を切られた人たちだ。(W. B. Rye, *England as Seen by Foreigners, in the Days of Elizabeth and James the First*,

London: J. R. Smith, 1865)

人びとは人間の尊厳や権利などといった概念を知らない時代に生きていた。シェイクスピア劇の恐ろしさは、むしろ、人間が人間を滅ぼさずにおれない、こころの奥深くに潜む病巣が白日のもとにさらされることにある。ハーマイオニの裁判の場では、ハーマイオニの罪ではなくリオンティーズの心の暗闇が明らかにされている。

ハーマイオニ王妃の裁判の場をかりて、シェイクスピアは、恐怖政治で人民を縛った残酷な時代を再現し、それを鋭く批判している。国王が仕組んだ王妃殺害の陰謀が批判されているとなれば、作家は大逆罪に問われて投獄され、作品は上演禁止にあう。だが、舞台がシチリアに設定されているために、当局の検閲の目をのがれることができた。

「むかしむかし……」に託して、シェイクスピアは、一人の王妃を離別し、二人の王妃を処刑した残酷な王とその時代を、白日のもとに曝してみせたのだ。

三つの国の文化摩擦

『冬物語』の二幕三場、リオンティーズは、親しげに語り合う王妃と親友を見て、突如として不安と疑惑にかられる。明るく友愛にみちた場面は急に翳り、物語は悲劇性をおびてくる。

『ハムレット』や『マクベス』や『オセロ』では、主人公のこころの変化と苦悩に深く踏み込んでゆくシェイクスピアが、『冬物語』では、リオンティーズが嫉妬にかられるまでのプロセスを省き、唐突とも思える心理の変化をこともなげに提示する。この場面は、当時の時代背景についての知識がなければ理解するのはむずかしい。

リオンティーズはシチリア王、ポリクシニーズはボヘミア王、王シチリア王妃ハーマイオニは、のちに、不貞の罪に問われて裁判に引き出されたときにみずから述べるように、ロシア皇帝の娘である。

ハーマイオニ ああ、ロシア皇帝であった私の父が

まだ生きていらして、このように娘が裁判されるのを

ごらんになったとしたら、きっと父は、みじめな私を

あわれみの目で見たことでしょう。

復讐の目ではなく！（三幕二場）

『冬物語』の冒頭の場面で、ヨーロッパの三つの地域、シチリア、ボヘミア（いまのチェコ共和国）、ロシア出身の王者たちが一堂に集まる。

シチリアはヨーロッパのもっとも南に位置し、ボヘミアは北に、ロシアはさらに北に位置する。人種的、地理的、経済的、文化的ちがいが、三人の行動様式を支配していることを見逃してはならない。三人の葛藤から、当時のヨーロッパが透けて見える。嫉妬深い夫が妻の貞操を疑い、周囲の者を不幸におとしいる物語とだけ読んではならないようだ。

シチリアの冬の時代

ハーマイオニ王妃の裁判の最中に、デルフォイのアポロの神殿に遣わされた使者たちが帰国し、アポロの神託を告げる。神託はハーマイオニの無実を証明していた。しかし、時すでに遅し、母の身をあんじるあまり、世継ぎの王子は母の裁判の最中に亡くなる。

王子の死を知らされたリオンティーズは自分の過ちを悟る。

「アポロが怒りたもうたか！ 神々がおれの不正に鉄槌をくだされたのだ！」（三幕二場）。

ハーマイオニは氣を失って倒れる。ポーリーナと侍女たちが、妃を抱いて奥に消える。ふたたび姿をあらわしたポーリーナは驚くべき知らせをもたらす。お妃が心痛のあまり亡くなったというのだ（実際は生きており、「彫像」としてポーリーナの庇護のもとに、夫のまことの改悛を待ちながら生きる）。

生まれたばかりの王女パーディタを捨てにいったポーリーナの夫アンティゴナスは戻らず（王女を捨てたボヘミアの荒野で熊に食い殺される）、ハーマイオニは王女が「カラスの餌食になった」と深い悲しみに身をゆだねていた。そこへ飛び込んできた王子の死。愛する王子を死神に奪われた王妃は、生きる力を失う。

ポーリーナは、後悔のあまり胸をかきむしって嘆くりオンティーズを激しくなじる。

いまさら後悔してもむだです。あなたの犯した罪は

いくら悲しんでも微動だにしないほど重いのですから。

絶望するほかないのですよ。あなたが一千もの膝を折り、裸で、断食して、つねに冬の嵐が吹きすさぶ不毛の岩山で一万年ぶつとおして祈りつづけたとしても、あなたのほうへ神々の目を向けることはできないでしょう。(三幕二場)

親友ポリクシニーズはカミロとともにボヘミアに去り、リオンティーズは王位継承者の王子も生まれたばかりの王女も失い、王妃までも奪われる。こちらのすきまに入りこんだ嫉妬心のために、リオンティーズはすべてを失う。王妃を疑い、親友にこちらの傷をおわせ、王子を死に至らせ、アンティゴナスに王女を捨てさせて死に追いやり、アンティゴナスの妻ポーリーナまでも不幸に突き落としたリオンティーズ、彼には、もつともむごい罰が待ち受けている。すべての人のこころの傷が癒え、シチリアが雪溶けの日をむかえるまで、厳寒の冬を彷徨しながら、みずから犯した罪と向かい日々を生きてゆかなければならないのだ。

シチリアから太陽の恵みは去り、冬の嵐が吹きすさぶ。冬の嵐に痛めつけられる不毛の岩山は、妄想のためにすべてを失ったシチリア王の凍えるようなこころの原風景だ。

はかなくも脆い人間の感情。それは冬の激しさに鍛えに鍛えられて、はじめて確固たるものとなる。しかし、それには大きな犠牲を伴う。リオンティーズは愛する者すべてを失った。

無実のハーマイオニも王子と王女を失ったうえに、生きながら死んだ状態、彫像として一六年もの長い年月を生きたければならない。シチリアに生きる者にとって、この一六年の年月は、いのちの灯火が消えた冬でしかなかった。

たであろう。友情を疑われたボヘミア王も過去の悲しい思い出から自由になることはできなかったし、シチリアを捨てたカミロは、募る望郷の想いを抱えて他国の王に仕えて生きることになる。王妃ハーマイオニをかばい、生まれた王女のために命乞いをしたポーリーナは夫を失い、孤独の一六年を、彫像となった王妃をかばいながら生きてゆくことになる。王の心に巣くった嫉妬という猛火はすべての者を業火で焼き、みなを悲劇に引きずりこむ。再生がなされるのは、「失われた子」パーディタが見出され、シチリアに帰国するときだ。昔話の枠組みが『冬物語』の根幹となっている。昔話のヒーロやヒロインは、「ヘンゼルとグレーテル」などのように、なんらかの理由で古里（家）を出るはめに追いやられるが、様々な辛い経験をしたあと幸せをつかみ、帰還する。

悲劇が頂点に達したとき、ボヘミアの牧歌的な世界がぱっと広がる。この世界のヒロインは、ボヘミアの荒れ野に捨てられたパーディタ（失われた子という意味）である。

シチリア、ボヘミア、ロシア出身の三つの国の出身の王者たちは、互いに愛するがゆえに憎みあい、長い試練に耐えたすえ、最後には和解に至る。その人間ドラマを、当時の文化的・歴史的な背景に視点を据え読みといてみよう。

物語の時代設定

物語の時代設定は、中世が衰え、イタリアで始まったルネサンスがいつそのの輝きを見せる一六世紀の半ば、古代ギリシャ・ローマの要素がルネサンスという枠組みのなかにはめ込まれている。

王妃ハーマイオニの貞操を疑ったシチリア王リオンテーズは妻を法廷に引き出し告訴したあと、デルフォイのアポロの神殿に使者を送り、神託を仰ぐ。ローマ教皇庁がアポロの神殿に置き換えられている。ハーマイオニ王妃の裁判の場に実際の事件が反映されていることが判れば、芝居は当局の検閲で差し止められる恐れがある。しかし、王が神託を仰ぐのがローマ教皇ならぬアポロの神託ならば、当局は検閲したくとも手がでない。物語が古代ギリシア時代に設定されているかのような印象をあたえるのは、イタリアのフィレンツェに端を発するルネサンスの風潮を反映していると同時に、検閲の目を逃れる絶好の手口でもあったのだ。

『冬物語』の時代設定を推察するのは不可能ではない。その決定的な要素は、ポーリーナが創らせた王妃ハーマイオニの立像である。絵の具で美しく彩色された立像は、イタリアの巨匠ジュリオ・ロマーノが長い年月をかけて製作したものだという。このジュリオ・ロマーノが、美術史に言及されているジュリオ・ロマーノ（一四九九―一五四六年）と同一人物だとすると、『冬物語』は、中世が衰え、ルネサンスが最高の輝きを見せる一六世紀の半ば以前に設定されていることになる。当時の人びとは、中世とルネサンスという、二つの世界観のなかで生きていたといわれている。

ルネサンスの人間は、時間的にはひじょうに隔たった二つの世界のなかに同時に生きていた。……二つの平行する過程の作用を受け、カレンダーのなかでは遥かに隔たる二つの文化が混在した思想と書物、古代とルネサンスの影響を受けて形成されていった。そのいっぽうで、二つの文化の中程に位置する中世がまだ息たえず、背景へと後退してゆく時期に生きていた。古典、中世、ルネサンスが、ルネサンスそのものをつくっていったのだ。

(Sukanta Chaudhuri, ed. *Renaissance Essays for Kitty Datta*. Calcutta: Oxford University Press, 1995. pp. 26-27)

ハーマイオニはロシア皇帝の娘

ハーマイオニは裁判の席で申し開きをしたあと、王子マミリアスの死を知らされ、気絶する。王妃をその場から運びだし、ふたたび姿を見せたポーリナは、王妃がショックのあまり悶死したことを、王に告げる。実際には、ハーマイオニは死をよそおって舞台から姿を消し、一六年後にふたたび姿を見せるのだが。このときのハーマイオニは四〇歳半ばぐらいと考えられる。

ジュリオ・ロマーノが没したのは一五四六年。ハーマイオニの立像は、かれが長年かけて製作したものであるのなら、一五四六年以前に制作されたことになる。とすると、ハーマイオニの生年は一五〇〇年ころ、ハーマイオニの父のロシア皇帝として、初めて外交上で皇帝（ツァリー）の称号を用いたイヴァン三世（在位一四六二―一五〇五年）が視野にはいつてくる。しかし、シェイクスピアと彼の同時代人によく知られていたロシア皇帝は、イギリスと初の通商交渉を持ち、初めて正式に全ロシアの皇帝と称したイヴァン四世（在位一五三三―一五三八）であった。彼はイヴァン三世の孫にあたる。父のロシア大公ヴァシーリー三世（一四七九―一五三三年）はロシアの統一を成就したが、皇帝を名のらなかった。ハーマイオニの父には、イヴァン三世とイヴァン四世の二人の皇帝が反映されているようだ。

イヴァン三世は、「大帝」とあだ名され、「全ロシアのもっとも偉大なる君主」と喧伝された。ノヴゴドロを二度にわたって攻め、その広大な領土をロシアに併合した。最初の妻と死別すると、東ローマ帝国最後の皇帝の姪でイタリア育ちのソフィア（ゾエ）を妃にむかえた。このことから、ロシアはイタリア文化の影響を受ける。イヴァン三世はクレムリン宮殿を、新しいイタリア風の石造りの宮殿に改築した。宮殿内の礼拝堂を設計したのはイタリア人である。ソフィア王妃が生んだ王女はシチリア王と結婚した。このような歴史的背景を考慮すれば、シチリア王がローマ皇帝の娘を妻にむかえたという『冬物語』の物語設定を、シェイクスピアの観客が荒唐無稽と考えることはなかったであろう。

ハーマイオニの父がイヴァン三世だとすると、母はソフィアということになる。ソフィア王妃の娘のように、ハーマイオニもロシア王女の身でシチリア王と結婚している。

ロシアの存在がイギリス人に意識されるようになったのは、イタリア人の冒険家で航海者ジョン・カボット（一四二五頃―一四九八年）が、イギリス王ヘンリー七世の許可をえ、アジア航路発見のために、ブリストル港を出帆し（一四九二年）、コロンブスに先立ち、アメリカ大陸に到達したときである。ジョンの息子セバステイアン・カボット（一四七二―一五五七年以降）は父にしたがって航海し、ヘンリー七世とヘンリー八世の庇護を受けた。一五五五年、メアリー一世の時代、セバステイアン・カボットは北路を航海して、白海に到達し、時の皇帝イヴァン四世から大歓待を受けた。このとき、皇帝は、「モスクワ会社」と名づけられたイギリスの会社に、ロシアとの独占貿易権をあたえた。それから十一年後の一五六六年、エリザベス女王の使者として皇帝イヴァン四世に拝謁したアントニー・ジェンキンソンはこう記している。

わたくしはイヴァン皇帝に拝謁をゆるされました。玉座にすわられた皇帝は、わたくしに、皇帝の御手に接吻することをおゆるしくできました。女王陛下のお言葉を伝え、陛下の書簡をお渡しし、贈り物を献上しました。皇帝がわたくしを晩餐にご招待くださいましたので、よろこんでお受けしました。そのときも、その後も、ロシアに滞在中ずっと、過分のおもてなしをうけました。」(Richard Haklüt, *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques, and Discoveries of the English Nation*, London: J. M. Dent, 1907, II. 73)

アントニー・ジェンキンソンの外交術が効を奏し、「モスクワ会社」はロシアとの貿易で莫大な利益を獲得する。(Richard Wilson, "Visible Bullets: Tamberlaine the Great and Ivan the Terrible," *English Literary History* 62(1995), 47-49, 60-62)と同時に、イギリスにロシアブームが起こり、イギリス人はロシアとロシア人に大きな興味を抱いた。

一五八二年から翌年にかけて、ロシアの使節団がエリザベス女王の宮廷を訪れた。このときのことだが、シェイクスピアの『恋の骨折り損』の五幕二場に反映されている。ナヴァール王とお付きの三人の貴族が仮面をつけロシア人の扮装をし、遠路はるばる旅してきたロシアの使節を装って登場する。そして、扮装というトリックを利用して正体を隠し、大胆にもフランス王女とお付きの三人の貴婦人に求愛する。四人の女性は「ロシア人に変装しておかしな服を着たおばかさん」たちをからかい大いに楽しむ。

一五八四年には、ジェローム・ボウズが初のロシア大使としてイヴァン四世の宮廷に派遣された。

イヴァン四世は、士族を中心とする特別の行政組織と軍隊を置き、貴族にたいして恐怖政治をおこない、農奴にたいしては移動の自由を制限し圧迫を強化したため、「雷帝」とあだ名された。残忍ではあったが、統治能力にすぐれ国土統一を前進せしめた。国際感覚もゆたかで、イギリスと初の通商交渉を結んだ。

エリザベス女王が、貿易と文化の両面で、イヴァン四世との関係を強めたことを知ったポーランド王は、女王に警告書を送り、ロシアとの友情に水をさした。

わたくしは、ロシア皇帝を次ぎのように判断しています。皇帝は文化にはまるで疎く、政治には無知きわまりない人間です。……わたくしは、皇帝の領土と境界線を接する国に住んでいますので、皇帝のことがよくわかるのです。皇帝と関係を深めるまえに、すべてのキリスト教国家の君主に警告します。どうぞ、国民の威信、自由、生命を皇帝にゆだねませんように。もっとも野蛮で残忍な敵に、臣下を引き渡しませんように。(Jesse D.

Clarkson, *A History of Russia*, New York: Random House, 1961, pp. 113-4)

ハーマイオニの父としてイヴァン四世も影をおとしていると仮定すると、シェイクスピア時代の観客にとって、ハーマイオニの嘆き、「ああ、ロシア皇帝であった私の父がまだ生きていらして、このように娘が裁判されるのをごらんになったとしたら、きっと父は、みじめな私をあわれみの目でごらんになったことでしょう。復讐の目ではなく！」は大きな意味を持っていたはずである。ハーマイオニの嘆きは字づら以上の重みをおびていたにちがいない。ハーマイオニのいう「復讐」とは、むろん父の軍事力のことを意味する。「雷帝」とあだ名され、全ヨーロッパ

パを震えあがらせた皇帝。その皇帝が、娘が罪なくして裁判にかけられるのを黙って見過ごすはずはない。復讐心に燃えた目で見るだけでなく、復讐のいかずちを降りおろすであろう。ハーマイオニの嘆きには、強力な皇帝を父を持つロシア王女の威信がこめられている。ハーナイオニのことばどおり、シチリアに雷帝の復讐のいかずちが降り降ろされる。

降りおろされる雷帝の怒りのいかずち

シェイクスピアが『冬物語』の種本にしたロバート・グリーンRobert Greeneの小説『パンドスト』(Pandosto 一五八八年)では、主人公はボヘミア王パンドストとその妻ベラーリア、ボヘミア王夫妻を訪れるのがシチリア王イジスタスとなっている。したがって、パンドストとベラーリアの娘が捨てられるのはシチリアの海岸である。『冬物語』では、シチリアとボヘミアが入れ替えられている。シェイクスピアはボヘミアに海がないことを知らなかったようで、ハーマイオニの娘はボヘミアの海岸に捨てられる。

シェイクスピアはボヘミアとシチリアを入れ替えたばかりでなく、シチリア王妃ハーマイオニの父をロシア皇帝に設定した。この設定の背後に政治的な意味あいがある。それを、シェイクスピアの観客は即座に理解したにちがいない。

ハーマイオニが父の名を口にした直後、アポロの神託がもち帰られ、役人によって読みあげられる。

「ハーマイオニは貞淑なり。ポリクシニーズは潔白なり。カミロは忠義の臣なり。リオンテューズは邪推深い暴君なり。その罪のない赤子は彼の真の子なり。その子を失ってふたたび見い出されざるときは、王はその世継ぎをうることをあたわず。」（三幕二場）

そこへ、リオンテューズの従者がいそぎ足でやってきて、王子が母の身を案じるあまり、亡くなったことを報らせる。王妃は気絶して倒れる。

リオンテューズは悲しみに悶え、叫ぶ。「アポロが怒りたもつたか！ 神々がおれの不正に鉄槌をくだされたのだ。」

復讐はなされた。シチリア王は世継ぎと妃と娘をいっぺんに死神に奪われるという、もっともおおきな痛手を受ける。ロシア皇帝の怒りのいかずちが降りおろされたのだ。

王子を死に追いやったのはリオンテューズである。父は息子にたいして、けっして言ってはならないことばを口にしたのだ。

リオンテューズ 母親の恥すべき不品行を聞くと、

がつくりとうなだれ、小さな胸を痛めて思いに沈み、

それをほかならぬわが身の恥ととも感じたのだらう、

元氣も、食欲も、安眠もなくなしたまま、すっかり

やつれてしまった。(二幕三場)

北ヨーロッパ人と南ヨーロッパ人

人種的にいって、ロシア人は、チェコ人やスロヴァキア人と同様に、スラブ系民族である。シェイクスピア時代の人びとが思い描いたロシア人の特徴は、四角ばった顔つき、いかつい体型、赤味がかったブロンドの髪、オレンジ色をおびた茶目などである。スラブ系のチェコ人とスロヴァキア人は五世紀に南下し、西のボヘミアにはチェコ人が、東のスロヴァキアには、スロヴァキア人が定住した。のちに、彼らの定住地が合体し、チェコスロバキアが成立する。しかし、ロシア共和国の崩壊とともに、再び分裂し、ボスニアとヘルツコビナは民族闘争に突入し、現在、東ヨーロッパの平和を脅かしている。

スラブ系のボヘミア王ポリクシニーズとハーマイオニはともにスラブ系、同じような肉体上の特徴を持つ。この事実を見逃してはならない。

シチリア王リオンティーズは、地中海民族の特徴をもっていると考えてよい。シチリアを支配していたのはアラゴン王国である。アラゴン王がシチリア王をかねた。その肉体的な特徴は、波のようになめらかな、カールのかかった黒髪、平均背丈は一メートル五、六〇センチくらい。痩せ形の体型で、頭は丸型、顔は細い卵型。鼻はまっすぐでいくぶん幅広い。目は真っ黒。したがって、スラブ系のハーマイオニとは対照的である。

黒い肌はしばしば南方系の人と関連され、黒い肌の人は、白い肌の人より文化的に、社会的に劣ると、考えられていた。人びとはいまもなお、この人種差別の桎梏から解放放たれてはいないが、シェイクスピアの時代には、肌

の色の違いから生まれる人種差別はいま以上に過酷であった。シェイクスピアは『冬物語』のまえに、肌の色の違いから生じる悲劇をテーマにした『オセロ』を書いている。

ムーア人のオセロは劣等意識にひどく悩まされ、黒い肌の自分が、白人社会で、將軍にまでのぼりつめたのは、軍人としてのたぐいまれなる資質と勇氣のたまものであると信じ、力こそがすべてであると考えている。デズデモナの父は黒い肌の男を夫にした娘を赦すことができない。

『から騒ぎ』のベアトリスは人種差別を受けているわけではないが、自分にだれも求婚してくれないのは、黒い肌のせいだとすねる。

「こうしてみんな晴れて結ばれるのに、陽焼けして黒い肌の私は、街角にすわり、『お嫁の貰い手はありませんか』と叫ばなくてはならないのね。」（三幕一場）

彼女に求婚する若者がいないのは、肌の色のせいではなく彼女の勝ち気な性格に原因しているのだが、彼女はこのことに思いがおよばない。

多くの批評家は、突如として嫉妬と不安にかられるリオンティーズに首をかしげ、シェイクスピアにしては人物造形が未熟だと断罪する。だが、実は、褐色の肌のリオンティーズは劣等感が強く、かれの嫉妬と不安は、妻ハーマイオニと親友ポリクシニーズが同じような肉体上の特徴をもち、似たような文化圏で育ったことに根を持ち、当時の観客はそれを即座に理解したにちがいないのである。

白い手のハーマイオニ

ハーマイオニとポリクシニーズは肉体的に似ているばかりでなく、文化を共有している。そのために、ハーマイオニとポリクシニーズのあいだには、同国人同士のみが持つ親しみと持つ気安さがある。リオンティーズがさらなる逗留をポリクシニーズに懇願しても耳を貸さなかったのに、ハーマイオニがポリクシニーズにもうしばらくシチリアに滞在しお楽しみくださいと頼むと、ポリクシニーズは即座に同意する。ポリクシニーズといっしょにいるときのハーマイオニはリラックスし、リオンティーズにはけっして見せない一面を見せる。

二人が語らうさまを目にしたリオンティーズは、不幸なことに、二人の親密さを曲解、誤解してしまうのだ。

ハーマイオニの白い手がリオンティーズの目を射る。そして、かれが求婚したときのハーマイオニのことばを思い出す。

ハーマイオニ 前に私がりっぱなことを言ったのは

いつでしたの。教えてください。ぜひ。

リオンティーズ そのときというのは、

洪柿のようなつらい三か月を嘯みしめ終わったあと、

ようやくおまえが白い手を開いて、おれの愛をしつかり

つかんでくれたときだ。おまえはそのとき、こう言った、

「私は永遠にあなたのもの」と。(一幕二場)

「白い手」は北方人の特徴である。かつて愛でた妻の白い手は、いまリオンティーズに北方人と南方人の違いをまざまざと思い起こさせる。白い手をもつ北方の女性は、性的に放縦であると考えられていたのだ。白い手をした妻は放縦な女性なのではないか。

白い手のデズデモーナに対峙したときのムーア人オセロのように、妻の白い手に言及するリオンティーズのことは、皮肉と怒りがこめられている。

北ヨーロッパに住む女性たちが性的な自由を謳歌したのにたいして、南方の女性たちは、そういった自由がまったくあたえられていなかった。

よく知られているように、地中海沿岸に住む人びとの日常生活では、名誉がとても重んじられた。……名誉とは女性の貞節、戦場での兵士の勇気などである。女性の名誉が社会のなかで危険にさらされた場合は、男性は女性を汚名から守る力がなければならない。」(Mario Pia di Bella, "Name, Blood and Miracles: The Claim to Renown in Traditional Sicily," in *Honor and Grace in Anthropology*, ed. J. G. Peristany and Julian Pitt-Rivers, Cambridge: Cambridge University Press, 1992, p. 151)

シチリアは長いあいだスペインのアラゴン王国の支配下にあった。カルデロンに代表されるスペインの黄金時代の芝居の主要なテーマの一つは名誉である。父親や夫は、娘や妻に悪い噂があるというだけで、相手を殺し、妻や娘をその手にかけ、家の名誉を守った。

シチリアなど南ヨーロッパの女性たちが性的に抑制されていたのとは対象的に、北ヨーロッパの女性たちは社会の抑制をそれほど受けなかった。彼女たちの「自由」は、北方人たちから、しばしば、性的行動の放縦とみなされていた。

イギリスの文人ロバート・バートンは『憂鬱の解剖』(The Anatomy of Melancholy、一六二一年)のなかで、北国の人びとについてこう記している。

温泉保養地バーデンに関する記述のなかで、マンスターはこう述べている。あらゆる階層の男と女は、なんの疑いも抱かずに、連れだって温泉にゆき、いっしょに風呂にはいる。「嫉妬などということばを、聞いたためしがない。」フリーズランドでは、女性は酒を飲みながら男に接吻し、お返しに接吻を受ける。オランダでは、乙女が若い男と手をつないで家を出、氷の上をいっしょに滑る。彼らはこういった害のない自由を楽しみ、外に出かけては、なんの疑いも抱かずに、いっしょに泊まる。(Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*, introd. Holbrook Jackson, London: Dent, 1932, III, 265)

バートンの書物は一六二二年に出版されたが、ここに記されたことは、ずっと以前からイギリス人のあいだで知

られていた。

リオンティーズ、ハーマイオニ、それにポリクシニーズ、それぞれの属する国が目で見ではつきりわかるように演出されれば、観客は三つの国文化の違い、人種の差を直感的に把握し、悲劇の源を理解するにちがいない。白い手のハーマイオニが、シチリア王リオンティーズのそばにより添って立っただけで、当時の観客は北と南の人種と文化の違いを了解したにちがいないのだ。両者の間によほどの信頼関係がないかぎり、オセロとデスデモナの場合のように、悲劇へと発展する。

繁栄するシチリアと貧にあえぐボヘミア

物語をさらに複雑にしているのは、リオンティーズとポリクシニーズのあいだには、文化的・人種的差異だけでなく、経済的な差異も横たわっていることである。

ボヘミア王のシチリア滞在は九か月。一国の王が、こんなにも長いあいだ国を留守にしてもよいものだろうか。ボヘミア王ポリクシニーズが暇乞いをする、シチリア王リオンティーズはさらなる滞在を強要する。

一六世紀をつうじて、シチリアの政治は安定し、経済は発展しつづけた。いっぽうのボヘミアは経済的に衰退し、退廃へむかっていた。

かつて、ボヘミアは、一四世紀に、カール一世の指揮のもと、力ある国家として頭角をあらわし、黄金時代をむかえた。カール一世にちなんで名づけられたプラハのカール大学は、東ヨーロッパ初の大学である。一四世紀の有

名な宗教改革者ヨハネス・フスが学び、教鞭をとった大学としても知られている。その後、ボヘミアは衰退しつつづけ、一六世紀には、文化的にも経済的にも威信を失っていった。さらに、宗教戦争と政治上の内紛のために、国家は分裂した。貴族階級が農民を圧迫した結果、多くの農民が農奴に墮落した。政略により、ボヘミア・ハンガリー王ラヨシュ二世はハプスブルグ家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世の孫マリア（マクシミリアンの長男フィリップ美公とスペイン王女ホアナの娘）を妻にむかえ、ボヘミア・ハンガリー王女はマリアの兄フェルディナンドと結婚した。一五二六年に、ラヨシュ二世が亡くなると、フェルディナンドがボヘミアの王位を継ぎ、プラハに居を定め、ボヘミアを支配した。

経済的困窮と政治的混乱のために、衰退の一途をたどるボヘミアとは対照的に、一六世紀をつうじて、シチリアはヨーロッパの穀倉地帯として、大量の穀物を北ヨーロッパに輸出し繁栄した。

北イタリア、フランスのプロヴァンス、スペインのカタロニア地方の大都市はたえず穀物の輸入を必要とし、そのためにシチリアは輸出用の大麦を集中的に育てる田畑となる。(David Abulafia, *Commerce and Conquest in the Mediterranean, 1100-1500*, Aldershot: Ashgate, 1993, p. 21)

一七世紀の初頭までには、シチリアのみならず、イタリア全土が西ヨーロッパでもっとも高い経済的発展をとげ、特別に高い生活水準を誇った。この時期に、ルネサンス文化がイタリアのフィレンツェに端を発し、イタリア全土で絶頂期をむかえたのは、経済的な繁栄と無縁ではない。

というわけで、この時代、イタリアと、ボヘミアとロシアでは、文化の水準において、月とスッポンほどの違いがあったのである。ロシアを旅した人は、モスクワ人の野蠻で不快な行動に驚きもし、面白がりもした。

不潔なほど汚い、長くかさばる服をまとっているため、動きがにぶい。もじやもじやの髪を肩まで垂らし、長く汚いあごひげはもつれている。食事のときはまるで豚のようにふるまう。真っ黒なあぶらぎった指をやたら皿や器につっこみ、いつもたらふく胃につめこむ。洗ったことのない皿からがつがつ食べ、やかましい音をたてながら酒を飲む。(C. Marsden, *Palmyra of the North: The First Days of St. Peterburg*, London: Faber and Faber, 1942, p. 27)

イタリアは、ボヘミアや北ヨーロッパの国々にくらべて、はるかに文化的で、豊かな生活水準を誇っていた。このような事実をふまえて『冬物語』を読むと、新しい視野がひらけてくる。

豪華なもてなしを苦痛に感じる

『冬物語』の冒頭、ボヘミアの宮廷人アーキデーマスが、シチリアの宰相カミロに、シチリアの歓待ぶりに感謝しながら、こういっている。

アーキデーマス いずれあなたが、いまの私同様の役目でボヘミアにおいでになれば、カミロ、あなたはきっと、いまお話ししたように、私どものボヘミアとあなたがたのシチリアとがどんなにちがうか、その目でごらんになるはずだ。……おもてなしの粗末さにわれわれは恥入ることになるうが、歓迎の心だけは恥かしくないものにするつもりだ。……包みかくさず申しあげるが、われわれはこのような豪勢はおもてなしはできかねる。……われわれがさしあげられるのは眠りを誘う酒だけだ。そうして酔いつぶれていただければ、おもなしの不足にお気づきにならず、お褒めもいただけまいが、おとがめもなからうというわけだな。(二幕一場)

シチリアのリオンテーズの宮廷の豊かさとボヘミアのポリクシニーズの宮廷の豊かさとは比べものにならない。貧にあえぐボヘミア人が山海の珍味にあふれ音楽や舞踏会を伴う夢のように豪勢なもてなしを九か月もの長いあいだ受けたら、どう感じるか。いまや、ボヘミア王とお付きの者たちは、感謝をとおりこして、心理的に苦痛を感じているのではないか。なのに、リオンテーズはお客の心情には無頓着、ボヘミア王に滞在の延期を強要する。

地理学熱

新世界探検にのりだしてிரい、イギリスでもさまざまな国の存在が知られるようになる。地形や気候が人間の気質や国民性に関わりがあると考えられ、地理学が一躍脚光を浴びる。

科学の分野における当時の地理学の地位は、今日におけるコンピューター・サイエンスのようなものだと考えてよ

い。一六世紀にもっともよく読まれもっとも大きな影響をおよぼした地理学の本は、フランス人の作家ジーン・ボードン (Jean Bodin、一五三〇―一五九六年) の手になるもので、シェイクスピアも愛読したと思われる。

ラテン語で書かれたボードンの『メソダス』(Methodus) は、文化と気候・地形の相関関係を説きあかし、論は政治や文化人類学にもおよび、一五六六年から一六五〇年にかけて、一三版を重ねた。ボードンの『共和国』(Republique) は四か国語に訳され、その縮小版が幾度となく版を重ねた。イギリスでは、一五八〇年頃から一七世紀の最初の四半世紀まで、ボードンの明晰な頭脳と豊かな独創性は高く評価され、彼の書物は人気を博した。

ボードンの名は歴史と地理学専攻の学者のあいだで知られていたばかりでなく、ボードンを手本に地理学の本を書く者もあらわれる。一五七七年に『イギリスの描写』を出版したウィリアム・ハリソンは、歴史家ホリンシェッド、詩人フィリップ・シドニー、文人トマス・ナッシュ、詩人スペンサーなどとともに、有名人として、ボードンの名をあげている。地理学の教師の経験があるロバート・バートンは、『憂鬱の解剖』のなかで、幾度となく、ボードンにふれている。その一端を紹介しよう。

ボードンは北ヨーロッパの国々における男女関係の自由と、イタリアで男女に課せられた抑制との対照と違いは、地理に起因するとしているといつてから、バートンはこう述べている。

ボードンはそういった相違は、国土や気候のせいであるとし、この問題を幅広く説明している。ボードンによると、南ヨーロッパの人は北国の人より、より熱く (hot) で、放縦で、嫉妬深い。熱い気候にがまんできず、桁はずれの欲情に身をゆだねる。……ドイツには大酒のみはさほどおらず、イギリス人はタバコ好き、フランス

人は踊り好き、オランダ人は海の人、船乗りで、嫉妬深い夫がいるのはイタリアだけである。(Burton, *Anatomy of Melancholy*, ibid., III, 264)

情報が発達した現在では、国民を一般化・規格化して見ることに抵抗をおぼえる人が多い。相違は国家的なものではなく、個人差があると考えからである。だが、数世紀前までは、ボーダンのような類型化された意見が声高に主張された。それは、シェイクスピアが創造したユダヤ人金貸しシャイロックや、『恋の骨折り損』に登場するスペイン人ドン・アルマードを見ればわかる。

異なる人種のあいだに平和を保つにはどうしたらよいか

観察をつづけ、膨大な量の資料を読んだ結果、ボーダンは次ぎのような結論に達した。南方の人間は、北方の人間と気質と性質が異なる。一つの気質が強く増大すれば、種として弱く小さくなる。北方人は熱く湿った気質。南方人は冷たく乾いた気質。北の人は声が大きく緑の目をしている。南の人は、声が小さく黒い目をしている。北の人は亜麻色の髪をもち、肌の色は白い。南の人は、髪も肌も黒い。北の人は寒さをおそれ、南の人は熱をおそれる。(Jean Bodin, *The Six Bookes of a Commonweale*, trans. R. Knolles, London: 1606, as quoted by Hodgen, *Early Anthropology*, ibid., p. 279.)

気質も文化も腫も異なる民のあいだに平和を保つにはどうしたらよいか。

ボーダンによれば、人種間に文化の多様性などというものは、元来存在しない。なぜなら、人類は、人類として一つにくくられるから同種なのである。

ボーダンは、さまざまな種族の人間が混じり合い、文化が交流しあうのがよいと考え、こう述べている。「種の混血は、習慣の変化をもたらし、人間の性質を少なからず変える。」(Early Anthropology, *ibid.* p. 282) 種の混血によって、新しい国家と都市が生まれると、ボーダンは考えていた。

ボーダンの独創的な説を肯定するような場面が『冬物語』にある。

『冬物語』では、三つの国の文化的、政治的、経済的な相違が衝突するいっぽうで、ボーダンが勧めるような、種の混血が現実のものとなる。ハーマイオニが生んだパーディタは、ボヘミアの海岸に捨てられたあと、羊飼いに拾われ、羊飼いの娘として育てられる。パーディタはシチリア人を父に、ロシア人を母として生まれた混血娘であるが、羊飼いに育てられたために、当然、純粹にロシア人である母ハーマイオニや、シチリア人の父とは、行動様式がことなる。

一六年後、「驚くばかりに美しい娘」に成長したパーディタは母ハーマイオニに生き写しである。

母に生き写しであるとはいえ、イタリア人とロシア人の血を受け継ぎ、ボヘミアで育ったパーディタの気質は母とは異なる。ポリクシニーズにシチリア滞在の延期を情熱的に乞う母ハーマイオニとはちがひ、パーディタは内気だ。羊の毛刈り祭りに、ポリクシニーズが変装してあらわれると、気後れして奥にひっこんでしまう。羊飼いの父はパーディタを押し出さなければならぬ。

羊飼 い、娘、なにしてるんだ！ ばあさんが生きてたときにやあ、

祭りの日となると、食い物、飲み物の仕度から料理まで、

女あるじ役から召使いまで、一人でこなしたもんだ。……

祭りの女王に選ばれたパーデイタはポリクシニーズをもてなす役をつとめる。パーデイタは、変貌した新しいハーマイオニだ。

パーデイタ (ポリクシニーズに) よくいらつしゃいました。

父の意向で、今日のお祭りの女王役をつとめるものです。(四幕四場)

ここに、一六年まえのシチリアの宮廷での場面が再現される。ハーマイオニがポリクシニーズをもてなしている場面である。

パーデイタはポリクシニーズに、縞模様縞石竹の花は、赤と白の花をかけあわせてできたもので、人工の手が加わっているから嫌いだという。すると、ポリクシニーズはこういつて彼女を諭す。

いいかな、娘さん。

野育ちの幹に育ちのよい若枝を嫁入らせることによって、

卑しい氣に高貴な子を宿らせることがあるだろう、これは自然のたりないところを補う、と言うより、すっかり変えてしまう人工の手だ。しかし実はその人工の手そのものが自然なのだ。(四幕四場)

パーディタがボヘミア王子のフロリゼルを伴ってシチリアに帰還したとき、アポロの神託が現実のものとなる。「その子を失ってふたたび見いださざれるときは、王はその世継ぎをうることあたわず。」

混血による平和―結婚祝歌

世継ぎのないまますぎた一六年は、シチリアにとってもシチリア王にとっても不毛の年月であった。世継ぎなき王国、このテーマは、シェイクスピア時代の人には、特別に深い意味をもっていた。エリザベス女王が結婚しないまま老年をむかえ、老齡にいたってもなお後継者を指名しなかったために、女王の死後、だれが玉座につくのだらうかと、国民は不安のなかで生きていた。一六〇三年に女王は没し、スコットランド王ジェームズ六世（ヘンリー八世の姉マーガレットの孫）が、イギリス王をかねることになり、長いあいだがみあつてきた二つの国が結ばれ、国民は安堵する。

ジェームズ六世の母はスコットランド女王メアリー・スチュアート、メアリー・スチュアートの母はフランスの

名門貴族ギーズ家の娘マリ。ジェームズの父スコットランド王ジェームズ五世の母はヘンリー八世の姉マーガレット。母方からはフランスとイギリスの血を、父方からはスコットランドの血を継いでいる。

イギリスはフランス、スペイン、ドイツ等、外国の王室と婚姻を結び、今日にいたっている。現皇太子チャールズの父はギリシア人、母方の祖母エリザベス皇太后はスコットランド人。叔父と姪、いとこ同士の婚姻関係を長いあいだ続けたスペイン王室が、精神に異常をきたした者を輩出して内部から崩壊し、ついに王位継承戦争（一七〇一—一七〇三年）へと発展し、消滅していった（一七〇〇年、ブルボン家のルイ一四世の孫フェリペ五世がスペイン王として即位）のとは対照的に、イギリス王室は混血によって存命をはかってきた。

祝婚歌

シチリア王女パーディタとボヘミア王子は結婚し、この結婚により、仲違いしていたシチリアとボヘミアが一つに結ばれる。二人のあいだに生まれる子は、スコットランドとイギリスとフランスの血をひくジェームズ六世のよう、シチリア、ボヘミア、ロシアの三つの血を引き、二つの国の君主になる。

『冬物語』は、一六二二年から三年にかけてのクリスマスシーズンに、イギリス王ジェームズ一世の娘エリザベス（一五九六—一六六二年）と、プファルツァ選帝候、バイエルンのフリードリヒ五世（一五九六—一六三二年）の結婚を祝して宮廷で上演された。それから五年後、フリードリヒはボヘミア王となる。

エリザベス王女は陽気で美しく、また勇氣ある若い女性として国民の人気の的だった。エリザベス王女がパーデ

イタに、ボヘミア王の息子フロリゼルがフリードリヒに重なってこないだろうか。文化的・人種的な相違をのりこえるのに、混血を提案したボーダンの異色の地理学が浮かびあがってこないだろうか。

エリザベス王女のその後の波乱にみちた人生も語っておかなければならない。フリードリヒはボヘミア王になってからわずか二年後、プロテスタント緒候の盟主として神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世と戦って破れ、オランダに亡命する。そして、失意のうちに、オランダで亡くなった。エリザベスが夫と暮らした二〇年余りのあいだに、一三人の子をもうけた。夫の死後も、父ジェームズ一世からの積極的な援助はなく、爪に火をともしつましさのなか、オランダでの亡命生活を続けた。エリザベスは夫のものだった選帝候領の一部を息子のために回復すると、一六六一年、イギリスに戻り、翌年に、レスター・ハウスで六六歳の生涯を閉じた。イギリス国民は、輝かしい未来を約束されながら、流浪の王妃として生きたエリザベスを「冬の王妃」と呼び、復位の日を待ち望んだ。復位の夢はかなわなかったが、スチュアート王家が、後継者のいないアン女王（在位一七〇二—一七一四年）で幕を閉じたとき、イギリス王としてむかえられたのは、エリザベスの孫（エリザベスの末娘ゾフィアの子）にあたるドイツのハノーヴァー家のジョージ一世（在位一七一四—一七二七年）であった。

シェイクスピアは、『冬物語』をエリザベス王女のために上演したとき、幾世紀にもわたっていがみあってきたイギリスとスコットランドがジェームズ一世の即位によって一つに結ばれたように、他国の君主に嫁ぐエリザベス王女の未来も幸あれかしと、祈ったのではないだろうか。パーデイタのように、未来のボヘミア王フリードリヒと結婚するエリザベス王女も混血の子を生み、イングラントとボヘミアの友好の一翼を担い、イギリスの国益のため

に大いなる働きをするであろう。他国へ嫁ぐ君主の娘は、エリザベス王女にかぎらず、嫁ぎ先の国に馴染みその民を愛すると同時に、特別大使として自国の利益のために貢献することが期待されている。

いまでも外国人嫌いといわれるイギリス人、シェイクスピアは四百年もまえに、民族の混血による融合による平和に諸手をあげて賛成していた。天才は時代の先端をゆく。シェイクスピアも例外ではなかった。

(アン・ブーリンの裁判については、ロンドン公文書館発行の *Letters and Papers, Henry VIII* (1536), 361-2 にもとづく。)